

永二年の役には源平二軍俱利伽羅・國見・猿馬場で戦うたが、この時は堡寨があつたとも思へぬ。觀應元年十二月桃井直常上洛し、宮樫氏春之を俱利伽羅嶺に要し、長享二年賊長越智伯善が俱利伽羅・松根に陣したともある。天正十二年佐々成政其の將佐々平左衛門・野々村主水に城を守らせ、翌年三月城を去つた。こゝに至つて堡寨の設があつたのであらう。後前田利家は近藤善左衛門・岡島喜三郎・原田又右衛門・平野五郎左衛門を置いた。

クリカラタウケ 俱利伽羅峠 藩政の時、加賀・越中の境俱利伽羅山を越える峠には、茶店四五軒があり、長樂寺の不動堂がそれに近かつた。地萬歳北國下道中の文句に、『前坂越えて俱利伽羅の、餅にだいしやうぶどうあり。』と詠うてゐる。

クリカラノタ、カヒ 俱利伽羅の戦 (一)

本會義仲の擧兵―安徳天皇治承四年九月本會義仲信濃に在つて、以仁王の令旨を奉じ、兵を募つた。養和元年六月平宗盛越後の人城資永をして之を討たしめたが、却つて筑摩川に破られ、源軍追躡して越後の國府に入つた。加賀の富樫・林等一族之を聞き、誓書を義仲に與へて之を援けんと申込み、義仲から信濃駒を贈つて賞せられた。然るに八月廿五日朝廷は、城資永を越後守に任じて更に義仲追討を命じ、廿六日平通盛・教經等に援兵として赴かしめられたから、通盛等九月九日越後に下つて會戦したが敗れ、資永も急に病んで歿し、越後は義仲の抑領する所となつた。

(二)平軍主力の北下―是に於いて平氏は、壽永二年四月十七日その主力を擧げて北國に向かはしめることになつた。その大將軍は維盛・

通盛・忠度・行盛・知盛・經正・維時・爲盛、侍大將は盛俊・盛綱・盛嗣・忠清・忠光・景清・景家・景高・忠經・季國・長綱・有國等で、見兵十萬、琵琶湖の東西から進軍した。その越前に入つたのは、玉葉に廿六日としてゐる。此の時義仲は先鋒を發して同國燧ヶ城に據らしめ、加賀の林六郎光明・倉光三郎成澄等に屬して防いだ。平泉寺の長吏齋明の平軍に内通するに及んで直に陥落した。源軍乃ち越前河上城を保ち、糧食又盡きて三條野に退き陣したが、平軍は之を襲うて林光明の子今城寺光平を戦死せしめた後、長畝城に入つて兵馬を休め、五月二日源軍の加賀篠原にあるを一蹴したので、源軍は佐見・白江・成合・池を過ぎ、安宅に退陣した。當時平軍甚だ多く、その先頭安宅に達した時、後隊は尙小鹽・橋立・黒崎・牛・鼻・熊坂・速浦・鹽越等に陸續し、維盛の本隊は篠原に在つた。因つて加賀・越中の兵は安宅に集つて防戦したが、平盛俊等馬を水中に進めて攻撃した。玉葉に『傳聞去三日官軍攻入加賀國合戰、兩方多死傷之者』といふのは是であらう。林・富樫・倉光等衆寡敵すべからざるを知つて安宅より遁れ、獨加賀の住人井家二郎範方のみ根上松に戦うて命を殞した。源平盛衰記にこの際富樫二郎家經は馬を傷つけられ、安江二郎盛高の郎黨の乗つてゐたものを得て北走したとあるが、越登賀三州志に、この家經が保元元年に死んだ人であるから、家經の誤であらうといふのは、従ふべき説のやうである。既にして源軍は今湊(湊)・藤塚(美川)・小河(小川)・雙河(相川)・倉部から大野に退き、維盛等は石川郡の富樫・林の居館に入つて捷を京師に報じた。時に齋明

(三)木會義仲の進軍―既にして義仲の本隊も

進んで越中六動寺の國府に着し、陣僧大夫坊覺明に命じ、戦勝の祈願文を草して遙かに之を白山權現に獻らしめ、又進んで般若野の御河端に至り、軍議を凝らして平軍の越中に出でざるに先だち、俱利伽羅の山嶺に陣するを待つて、迂回軍と共に腹背挾撃するの策を立てた。之に對する平軍では、全軍を二隊に分ち、搦手の大將軍は通盛之に當り、忠清・景家以下三萬騎、宮腰(金石)・德藏(不明)・大野・青崎(粟ヶ崎)・室尾(室)・日角見(日角)・白生(白尾)を経て能登に入り、志雄山に陣し、追手の大將軍は維盛・行盛・忠度之に當り、忠經・季國・長綱・範高等七萬騎、森本(森下)・大庭(大場)・崎田(才田)・井家・津播多(津幡)・荒井(荒屋)・閑野(七野)・竹橋を経て俱利伽羅に向かつた。因にいふ。平將知度は保曆間記に、盛俊は一代要記に俱利伽羅口に在つたとするが、源平盛衰記では二人共に志雄口に減裂してゐる。

(四)會戰―義仲は平軍の情報を得て、五月十

一日部署を定め、源行家に兵一萬を分かつて志雄山の敵を率制せしめ、その他は盡く俱利伽羅に向かうた。この方面では、今井兼平が松永の日宮林に陣して中央縦隊の前衛司令官となり、義仲は埴生庄にあつて總司令官となり、而して樋口兼光・根井小彌太等の諸將は各兵を分かつて、平軍の背面に迂回した如くであるが、その兵數等は諸書に異同があつて判明しない。かくて平軍は俱利伽羅を越えて、將に坂路を東に下らんとしたに、白旗の既に日宮林の樹頭に飄るを見たので、山路崎嶇容易に敵の攻撃を加へることなかるべきを思ひ、仲夏の涼風に露營の快夢を貪つたが、夜半源軍の襲撃に會うて、一萬八千餘騎の兵が溪谷を埋めて戦死したと源平盛衰記は書いてゐる。この戰を一代要記には合戰自未刻二及晚と記して晝のことにしてゐる。

(五)平軍の退却―俱利伽羅から敗走した平軍

は、加賀の海岸なる宮腰・佐良嶽に至つて旗を上げ、志雄軍も亦來り集つた。志雄方面では行家の軍に攻撃を加へて將に勝たうとしたのであるが、俱利伽羅の主力が敗れたから退いたのであつた。佐良嶽は大野湊神社の舊社地で、宮腰は之に接して居り、河北潟を挾んで東西兩路から退却した敗兵を收容するに最も好適の地であつた。源軍は之を急追せず、平岳野の木立林に陣を張つた。今金澤の西郊平岳野神社の附近であらう。次いで五月廿五日維盛の軍は宮腰の陣を撤し、藤塚・今湊を経て安宅を保つた。

(六)兩軍の兵力―この戰役に於ける兩軍の兵力に就いては、玉葉に平軍四萬源軍五千と記してゐるが、源平盛衰記あたりよりも事實上

は、義仲の兵を越中の平野に出でしめるを不可とし、越後の境寒原の嶮に阻止するの策を上つたので、維盛は之を容れて盛俊に先驅せしめた。是に於いて盛俊は直に俱利伽羅山を越え、越中中矢部川を渡つて般若野に陣したが、義仲の將今井兼平も既に同國に入つて吳服山に陣してゐた。五月九日卯の刻の拂曉、兼平先づ進んで盛俊の軍を襲ひ、勝敗容易に決しなかつたけれども、未刻から平軍不利に陥つて、日没小矢部川の線に後退し、その死を免れた者は更に加賀に背進した。